

一八八二年二月二十八日(火)

動、不動なる全宇宙に遍満せる至聖かみを覺らせて下さる師グルを礼拝し奉る

—— ヴイシユヴエーシユワラ・タントラ 2 ——

二度目の訪問——師と弟子の会話

二度目にお会いしたのは、午前八時ころだった。その時、タクールは床屋とこやにヒゲをそらせておられた。まだ少し肌寒い時候なので、あのかたは綿織物モスリンの肩掛けをはおっておられた。肩掛けには波形の赤い縁ふちどりがしてある。校長をみると、「オヤ、来たのかい？ さあ、ここへお坐り」とおっしゃった。以下の会話は、部屋の南東にあるベランダでしたのである。床屋が同席していた。タクールはひげをそらせながら、ポツリポツリ校長と話をなされた。肩掛けをして、足にはスリッパをはき、お顔にはほほえみをうかべておられる。話すとき、ややドモリ気味である。

聖ラーマクリシユナ「(校長に向かつて) えーと、おまえの家うちはどこだい？」

校長「はい、カルカッタでございます」

聖ラーマクリシユナ「ここではどこに泊まってる？」

校長「こちらでは、バラナゴルの姉の家におります。イシャン・カヴィラージ(家住)の宅でございます」

聖ラーマクリシユナ「ああ、イシヤンの家かい」

〔ケーシャブ・チャンドラ・セン——大実母の前でのタクルの嘆き〕

聖ラーマクリシユナ「そうだ、ケーシャブはどんな具合かな？ 大病にかかっていたが……」

校長「私もその話は聞いておりました。もうよくなられたようでございます」

聖ラーマクリシユナ「わたしはね、ケーシャブのために、椰子の実と砂糖を供えると大実母に約束したよ。夜明け方に目がさめるとすぐ、大実母のそばに行ってお願ひしたんだ。『マ、ケーシャブの病気をなおしておくれ。ケーシャブがいなくなったら、カルカッタへ行つたとき、わたしは誰と話をしたらいんだい？』——こう言つて、椰子の実と砂糖をお供えするからと、約束したのさ。」

あ、そうだそうだ、クツクというイギリス人がやつてきたそうだね？ カルカッタで何か講演をしてるそうじゃないか？ いつかケーシャブが、わたしを汽船に乗つけてくれたが、そのときクツクというイギリス人もいっしょにいたかな？」

校長「はあ、私もそのようなことは聞いておりますけれども、その人の講演はまだ聞いたことはありません。どういふ人か、詳しいことは存じておりません」

（訳註）イシヤン・カヴィラージ——ラーマクリシユナの医者でマヘンドラ・グプタの姉の夫。カヴィラージはインドの伝統医学アーユルヴェーダの医者を目指す。

〔在家の人、および父親としての義務〕

聖ラーマクリシユナ「先だせんって、プラタプの弟が来ていた。ここに、二、三日もいたかな。仕事がなくてね——ここにいたいと言うのさ。きいてみると、女房と子供らをみんな、女房の実家さとにおいてきているんだよ。また大ぜい子供がいるんだよ！ わたしや、叱なぐってやったよ。子供をやたらに作さっておいて、近所の人が面倒みて大きくしてくれるとでも思っているのかって？ 女房子供がほかの人に食くわせてもらっている、実家さとにあずけっ放はなしにしているってことを、恥はずかしいとも思っていない。ウンとおこりつけて、仕事をさがせと言いってやった。そうしたら出て行いったっけ」

無智の病にて盲目となりし者の目を見開かせる智慧の目薬を持つ師を礼拝し奉る

—— ヴィシユヴエーシユワラ・タントラ 3 ——

校長は叱られて、彼の誇りがコナゴナになったこと

聖ラーマクリシユナ「(校長に向かつて)とこで、あんたは結婚しているのかい？」

校長「はい。結婚しております」

すると、聖ラーマクリシユナは身ぶるいをしながら、

「おい、ラーム(原典註)ラル！——この人は結婚してしまっただよ！」

校長は何か大そう恐ろしい罪でも犯したような気分になって、頭を下げて黙って坐っていた。心の中に、結婚することがそんなに悪いことなのだろうか、という割りきれぬ思いがひろがった。

タクールはまた質問なさる――

「子供はいるのかい？」

校長の胸はドキン、ドキンと高鳴る。恐る、恐る――

「はあ、子供もおります」

タクールはまた、いかにも残念そうにおっしゃった――

「やれやれ、子供までいるのか！」

こうまできつく言われて、彼はただ呆然となってしまう。彼のプライドは粉ごなになってしまう。

まもなく、タクール、聖ラーマクリシュナはまた慈悲ぶかいまなざしをして、やさしく言い出される――

「ね、お前さんはいい人相をしているよ。わたしは額や目などを見れば、どんな人間かすぐわかる。――そうだ、お前さんのつれあいはどんな性質かね？ ものわがりのいい女かい、それとも、悪い方かい？」

（原典註） ラームラルー――タクールの甥おひで身の周りの世話をしているカーリー神殿の役僧。

〔智識とは？ 神像礼拝〕

校長「はあ、善良ではありませんが、無智な女でございます」

聖ラーマクリシユナは、不愉快そうにムツとなさつて――

「では、お前さんは智識人というわけかい？」

彼は、シ智識ある人シとはどういう人のことを言うのか、シ無智な人シとはどういう人のことか、まだ理解していなかった。これまでは、読み書きを習い、書物が読めたら、シ智識があるシのだと思つていた。この誤つた考えは後になつてなくなつた。神を知ることが、シ智シであり、神を知らぬことこそが、シ無智シであると教えられたからである。

タクールに、「では、お前さんは智識人のつもりなんだね？」と言われ、校長のプライドはまたもや酷い打撃をうけた。

聖ラーマクリシユナ「じゃ、あんたは形のある神を信じているのかい、それとも、形のない神を信じているのか、どつちだい？」

校長はあきれかえつて心の中でつぶやく――有形の神、つまり人格神を信じていたら、神は無形だなどと考えるはずがないではないか？ 神は無形無相だと信じているかぎり、形ある人格神が信じられるだろうか？ 反対のものが、二つとも真実だなどということがあり得ようか？ 白いもの――たとえば牛乳が、同時に黒いなどということが、どうしてあり得よう？

校長「はい――。神は無形である、という考え方が私は好きであります」

聖ラーマクリシユナ「そりゃ結構だ。どっちかを信じていればいい。神は形がないものだと思ってる——それはいいことだ。けれど、こう思っているとはいけないよ。つまり、これだけが正しくて、ほかのは皆まちがいだ、なんて。神は無形だというのも真実だし、神には形があるというのも真実。このことをよくおぼえておきなさい。そして、あなたが信じているものを、しっかりとつかんでいなさい」

校長は、二つとも真実であるという言葉を重ねて聞いて、すっかり驚いてしまった。こんな言葉は彼が勉強した書物には出ていない。

彼のプライドは三たび粉碎された。しかし、まだ完全にやつつけられたというわけではない。そこで、もう少し議論を進めてみた。

校長「なるほど、神は有形である——このことは信じたといたしましょう！ しかしながら、土くそれで作った偶像は、その神ではありませんまい——」

聖ラーマクリシユナ「なんで土くれなものか！ たましいのもった聖像だよ！」

校長はまた、たましいのもった像が理解できなかった！ 彼は言いつづけた。

「土の偶像を拜んでいる人に向かつては、土の像は神ではないということ、そして土像の前では心まごころの神を念じて拜み、土くれは拜むべきではないと、教えてやるべきであります」

〔講義と聖ラーマクリシユナ〕

聖ラーマクリシユナは、おもしろくなさそうに、こう言われた。

「あんたら、カルカッタの連中はみな同じだね！ ただ講義レクチャーするだけ。教えるだけ——自分が誰から教わろうなんてちっとも考えないんだから。

お前さんはいったい、どなた様だい？ 人を教え導くほど、偉い御方かい？

教えて下さるのは、あの御方おかた(神)だよ。

この宇宙を創つくった御方——月や、太陽や、季節や、人間、動物、そのほかありとあらゆるものを造った御方。生きものを養う方法——つまり育てて大きくするために、父親と母親を創つくって、両親ふたおやに子への愛情をもたせた御方——その御方が教えて下さるんだ。神さまは、こんなにもいろんな方法みちをつくって下さったのに、『この方法みちだけは、お造りにならないだろう』なんて、どうして言える？

もし、知らせることが必要なら、あの御方が教えて下さるよ。あの御方は内アンタルなる導チャーミンき手なんだよ。土の像を拜まつむことに何か間違いがあるとしても、神さまがご自分のことを拜まつんでいるんだっていうことをお気付きにならないとでも言うのかい？ ——ほかでもない、あの御方の御名とらなを唱となえているんだからね。あの御方はそんな拜まつみ方にも満足していなさるんだよ。なにも、お前さんたちがゴモクソ言うことないじゃないか？

お前さんは、自分が正しい智識と信仰を持つように、一生懸命に努力すりゃいいんだよ」

今度こそ、校長の思い上がりは、ほぼ完全に粉碎されたようであった。

彼は思った——このかたの言われることは全く正しい！ 私が人に教える必要など、どこにある？ 私は神を知っているのだろうか？ また、神に対する信仰をもっていると言えるのか？ 自分で寝る

場もないくせに、仲間に泊まっていけと言う——知りもしないことについて人に教えようなどというのは、恥ずべきことだ、少し脳みその足りない奴のやることだ！ 算術や歴史や文学のように人に教えられるものか？ この、神の真理を！ このかたの言われることは、一つ一つ肝に銘じる。

校長がタクルと交わした議論は、これが初めて、また最後でもあった。

聖ラーマクリシュナ「あなたは土の神像を拜むのがどうのこうのと言ったがね、たとえ土でできていても、それは拜むだけの理由があるんだよ。神さまは、いろんな種類の拜み方を準備して下すつたんだ。宇宙のご主人であるあの御方が、みんなつくって下すつたことさ。——持ち主がいろいろに仕分けをなさるんだ。それぞれの腹にうまく納まるように、大実母さんはいろんな料理をこしらえてくれるのさ。

ある家の母さんに五人の子供がいるとしよう。魚が手に入った。母さんはいろんなふう料理してくれる——みんなの胃に合うようにね！ この子には魚のピラフ、あの子には酢魚。煮付けにしたり、フライにしたり。皆が喜んで食べるように、胃にもたれないように工夫してね——。わかったかい？」

校長「はい、よくわかりました」

世俗の荒海を渡りきる導き手である師

聖ラーマクリシュナを礼拝し奉る

(サンスクリット)

信仰の方法

——校長は謙虚におたずねした。「どんなふうにして神のことを想おもつたらよろしいのでしょうか?」
 聖ラーマクリシュナ「神の御名や讃歌をいつも唱えていること。それから聖なる交わり——つまり、神を信仰している人や、サードゥたち(出家や聖者など、真理探究にはげむ人たち)と、なるだけ親しくつきあうようにすることだ。

世間サンサーラで、世俗の仕事に朝から晩まではまりこんでいては、神さまを思い出すヒマなんかありやしない! だから時どき独りになって、静かなところであの御方を想うこと——これが大そう必要なんだよ。はじめのうちは、時どき独りにならなければ神を心に抱きつづけることは難しい。

樹も若いうちは周囲まわりに囲かこいをしておかなくてはね。囲かこいがないと、山羊や牛に食われてしまうよ! 瞑想するなら心の中か、人の来ない場所、森の中に行つてすること。そうして常日頃から、真実と不真実を見分ける習慣をつけることだ。神だけが真実で、永遠の実在だ。ほかのものはみな非実在で、一時的な、無常のものだ。こう見分けていって、一時的なものを自分の心から離していくのさ」

——校長はまた、うやうやしくおたずねした。

「世間にあつては、どんな心掛けで生活したらよろしゅうございませうでしょうか?」

〔在家の人の捨離——その方法は——独りになって修行サドナすること〕

聖ラーマクリシュナ「何なりとすべき仕事はして、ただ心はいつも神を想っていなさい。女房子供や親たちといっしょに住んで、よく面倒みてやりなさい。自分のもののように大事にしてやれ。でも心の中では誰一人、自分のものじゃないということをしつかり心得ておくんだね。

金持ちの家の女中は、お邸やしきのなかのあらゆる仕事をして、朝から晩までセツセと働いているが、心はいつも郷里くりにの家へ向いている。また主人の子供たちを自分の子のように可愛がって育てて、ラムラームとかハリーハリーなんて呼んでいるが、心の中では自分のものじゃないことを百も承知だ。亀は水のなかを泳ぎまわっているが、心はどこにおいているか知ってるかい？——岸辺だよ。卵を産みつけてある場所だ。

世間でいろんなことをしているも、心は神に預けっ放しにしておきなさい。

神への信仰を持たずに世間で暮らしていると、だんだん心が世俗にからまっていく。災害や、悲しみ、苦しみにガマンができなくなってくる。世間のことを考えれば考えるほど執着が増してくる。

手に油をぬってから狸カンタール好果ジャックフルーツの実を割らなけりやいけないよ！ そうしないと手にヤニがべたべたくっついてしまう。神への信仰という油を手をぬってから、世間の仕事をするのだ。

だが、この信仰をわがものにするには、独りひとになることが必要だ。バターをとるときは、人ひと気けのないう静かなところで凝こり乳どろを固かまらせなければならぬ。あちこち動うごかすと、なかなか固かまらぬからぬ。そのあと独りで静かなところに坐まって、ほかの仕事はみなさしおいて、おもむろにかきまぜる。こうしてバターは出来上がるんだよ。

それに、いいかね——心を静めて神を想うことによつて、正しい智慧も、ジュニヤトナ 離欲の心も、ヴァイラキヤ 信仰も、わがものにする事ができるんだよ。世間のことばかりにかまけていると、心がだんだん低くなつていく。世間では、ただ女と金カネのことしか考えないからね。

世間は水、心は牛乳。——水の中に入れてしまえば牛乳と水とまざつてしまつて、純粹の牛乳は探しようもなくなる。牛乳を固まらせてバターにすれば、たとえ水に落としても浮いている。だから静かなところで神を拝み、ジュニヤトナ 智慧と信仰バクテイという形のバターを手に入れることだ。そのバターは世間の水に落ちても、まじつてしまわずにずっと浮いているからね。

それといつしよに、正しい分別が大切だ。女と金は、はかないもんだよ。神さまだけがたった一つの実体だ。金でいったい何が入ると思う？ 米、豆、着物、それから住む場所が手にはいる。これくらいなものさ。だが、金で神さまは手にはいらぬ。だから金が人生の目的になんか、なれっこない。これが正しい分別というものだ、わかるかい？」

校長「はい、よくわかります。最近、ス プラポータ・チャンドラダヤー(目覚めの月の出)という戯曲を読みましたのですが、そのなかに、『本質ソフストを見きわめよ！』というくだりがありました」(訳註、プラポータ・チャンドラダヤー——後にラーマクリシュナの在家の弟子となつたギリシユ・チャンドラ・ゴーシユの作。彼は近代ベンガル戯曲の父といわれた)

聖ラーマクリシュナ「フーム、本質を見きわめよ、か。なるほど。

まあ、考えてごらん。金のなかに何がある？ 女の体のなかに何がある？ よく本質を見きわめて

ごらん。美人にみえるのは皮一枚だけで、体のなかには骨だの、肉だの、脂肪だの、ウンコや小便、みんなそんなものばかりだ。こんなものに男たちはウツツをぬかして、神さまを捨てるとはどういう了見なんだろう？ どういうわけで一番大切な神さまを忘れてしまっただろうね？」

〔神を見る方法〕

校長「神を見ることは可能でございましょうか？」

聖ラーマクリシユナ「ああ、必ずできるよ。時どき独りになって静かなところで坐りなさい。それから神の御名をとなえたり、讃歌をうたったり。本ものと偽ものを見分けたり——。こうした方法に頼っていけば、できるよ」

校長「どんな状態になれば、見神できるのでございましょうか？」

聖ラーマクリシユナ「無我夢中むがぼうちゆうになって、神を求めて泣けば見られる。

妻子のためなら人は水がめいっばいもの涙を出す。金のためなら涙の池で泳げるほど泣く。だが、神を求めて誰が泣いている？ 本気になって神を呼ぶことだ」

こうおっしゃって、タクールは美しい声で歌を口ずさまれた。

心をこめて呼んでごらん

本気になって呼んでごらん

お前の泣き声きいたなら
大実母かあさんこずにはいられない

心の底からあこがれて

真まつ赤かなバラとベルの葉に

愛あの白び檀たんませあわせ

大実母かの御足みに供あげてごらん

聖せいラーマクリシュナ「無む我わ夢む中ちゆうになる、ということとは、夜明よあけけの空そらが赤あかくなることだ。暁あかつきにつづいて、お日ひさまが姿すがたをお見みせになる。熱心ねっしんの次つぎが見神みかみだ。

三さんつの引ひ力りき(惹ひきつける力ちから)を合あわせて持もつことができたなら、あの御方みかたは姿すがたを見みせて下さる。世俗せきじゆの人ひとが世俗せきじゆの物もの(自みづか分の所有物しやうぶつ)に對たいして感かんじる引ひ力りき。母親ぼてんが子こ供どもに對たいして感かんじる引ひ力りき。妻つまが夫おとこに對たいして感かんじる引ひ力りき——この三さんつの引ひ力りきをいっしょに誰たれかが持もつたとしたら、その強ちやうさで神かみさまを引ひきつけて、つかまえることができるよ！

つまり、こういうことさ。神かみさまに惚ほれるということだ。母親ぼてんが子こ供どもたちを可か愛あいがる。妻つまが夫おとこを愛あいする。世俗せきじゆの人ひとが世俗せきじゆの物ものを大だい事じにする。この三人さんにんの愛あい、この三さんつの引ひ力りきをいっしょくたにして、そつくり神かみさまに差さし上げることができたら、きつとあの御方みかたに会あえるよ。

とにかく、夢中になってあの御方を呼ぶことが必要なのさ。猫の仔はただミャーミャー啼ないて母親を呼ぶことだけ知っている。母猫が置いてくれる場所にいる。台所におかれたり、地べたにおかれたり、ときにはベッドの上におかれたりする。困ったことがおきれば、ただミャーミャーないて母さんを呼ぶだけ。ほかには何も知らない。母猫はどこにいても、このミャーミャーという啼き声をきけばすぐにきてくれる」